

第264回くらしの植物苑観察会 令和3年3月27日（土）

梅と桃と桜の宴、その歴史といま

辻 誠一郎（東京大学名誉教授）

梅と桃と桜、これら3種は一年を通してもっとも年中行事や宴にかかわりの深い植物であることはよく知られています。梅は「梅花祭」、桃は「曲水の宴」や「桃の節句」、桜は何と言っても「花見の宴」。冬から春へ、植物だけでなく動物たちも生き生きとしてくる季節です。間違いなく人間も、こころ躍り、わくわくとしてくる季節です。梅と桃と桜といっても、これは一般的な呼び方で、正式にはウメ、モモ、サクラ属という和名（普通名）があります。桜は狭い意味ではヤマザクラやソメイヨシノを指していますが、エドヒガン、オオシマザクラ、マメザクラなど多数の種を含んでいるのでサクラ属としてあります。ここではまず、これら3種の植物の性質や文化史を概観してみましょ。そして、それぞれの宴とのかかわりを考えてみましょう。

ウメはアンズ属に含まれます。日本国号を掲げて日本国家がスタートしたころ、あるいはそれより少し前に、中国からもたらされた外来植物です。国家の基礎となる律令制の導入とともに日本にもたらされた中国文化の一つと考えていいでしょう。その文化とは花文化です。花を観賞し、そのところを歌にするといった「梅花の宴」に代表されるような花文化です。観梅文化は舶来のものであり、限られた上流貴族に囲われたものであったでしょう。

2月25日は菅原道真の命日です。京都・北野天満宮では「梅花祭」が催されますが、道真は梅をこよなく愛したと伝えられ、道真とウメは切っても切れない関係になっています。大宰府では梅を愛でる宴会「梅花の宴」が催されたことを万葉集から知ることができます。この「梅花の宴」の序文から引き出された文字二つから今の元号が「令和」と命名されたことはよく知られているところです。古代から中世への移行とともに、中央集権が和らぎ、権力が地方に分散される過程で、貴族文化が地方や一般市民に広がるようになり、観梅文化は急速に各地に伝えられるようになりました。これを後押ししたのは中国仏教である禅の普及や天神信仰が深くかかわっていると考えられます。

モモはモモ属に含まれます。モモといえば甘くてジューシーな果実を思い浮かべる人が多いと思いますが、古代以降ではハナモモを観賞することも多かったと思われます。もちろん、モモが中国から日本にもたらされた弥生時代以降では、モモの果実が遺跡から大量に出土し、果実も重要であったことがわかります。モモの果実は、薄い皮によっておおわれていて、それをむくとジューシーで肉質な実が現れます。これを中果皮と呼んでいます。ふつうこの部分を食用にしています。果実の中心部には刃物では切れない堅い部分が出てきますが、これは種子ではなく、核と呼んでいる部分です。この堅い核の中に種子が入っているのです。現代では種子を食べる習慣はすたれていますが、かつては薬のように高価なものとして食べられていたのです。種子は仁（じん）と呼んでいます。また、近縁のアーモンドは、中果皮は薄くて食べられませんが、種子をナッツとして食用にしています。アーモンドが大好きという人は多いと思いますが、あれはモモで言えば種子を食べているのです。

中国では、モモは鬼に勝つ木と信じられていたようです。二つに割れる果実は女性そのもののシンボルともみられ、妊娠時のつわりにも効くとされていました。平安時代の追儺（ついな）の行事に用いられた弓はモモで作られ、卵槌（うづち）の材もモモでした。小正月には玄關に桃符（と

うふ)を掲げて避邪を祈ったのです。モモの材で作ったお守りを持っている人もいるのではないのでしょうか。古代ではすでに上巳の花としてモモが定着していたようで、上巳の節句を桃の節句と呼ばれていました。女の子が健やかに育ち、子供に恵まれるようにとの願いをモモに託したのでしょうか。

日本の花といえば桜です。前にも述べたように、日本で桜といったときにはミヤマザクラやマメザクラなど9種が含まれてしまいます。サクラという種名はなく、サクラ属に含まれる一群と呼ばなくてはなりません。ウメやモモが中国から日本にもたらされたのに対して、サクラ属はもともと日本の野山に自生していたものです。たくさんの品種が見いだされ、八重桜のような突然変異体ができしたのは、古くから人々が桜に深くかかわってきたからでしょう。おそらく桜だけを伐採せずに残し、また、異なる品種の桜を野山に植えていったことが、複数の種の交雑を促したのではないかと考えられるのです。八重桜の品種群は、おしべ、めしべが花弁となって、種子を作ることができなくなったのです。そのため一代で絶えざるを得ないのです。それを絶やさないために、接ぎ木をするなどの工夫がなされてきました。

桜は稲の神の依り代であり、先祖の霊の依り代であると考えられてきました。桜の開花はたわわに実った稲穂に見立てられ、秋の豊作の願いが託されたのです。北陸の山間部では桜の花の咲くころ、4月の下旬になりますが、蓮如さんの山行きといって、家族こそって重箱や酒を携えてお墓参りをするところがあります。先祖にお出会いし、豊作を祈願する重要な行事です。これも宴と呼べるでしょう。

ウメは1月から2月、モモは2月から3月、サクラ属は3月から4月、順を追って咲き誇っていきます。ウメもモモも開花してから葉っぱがでてきます。サクラ属も多くが開花してから葉っぱが出てきます。ヤマザクラやソメイヨシノはその典型です。このように葉っぱが出る前に花が華々しく咲き誇るところが共通しています。開花が春であること、開花の華々しさが祭宴や祝宴などさまざまな宴と結びついてきたのでしょう。

くらしの植物苑には、これらのほかに黄色の花を咲かせる植物が幾種類もあります。それらにも花を先に咲かせるという共通した性質が見られます。いったいなぜ葉っぱより開花が先で、こんなにも華々しいのでしょうか。一緒に考えてみましょう。

.....

次回予告 第265回くらしの植物苑観察会 令和3年4月24日(土)

「桜草の栽培史—江戸中期から幕末まで」水田 大輝(日本大学生物資源科学部専任講師)

13:30~15:30(予定) 苑内休憩所集合 申込不要 定員20名